



巻末エッセイ

はっだて旅便り

「今日もぷらぷら」

142

「年末年始は餃子で運試し?」



文月 齊 (ふみつき さい)
埼玉県出身。
人と街、自然と文化を題材に、
みちくさばかりの旅を続ける
エッセイスト。
函館、埼玉、大阪を拠点に
旅を満喫中。

前略、変わりはないか？

新しい年が始まったね。この町に来た当初は衝撃的に感じた年越しの風習も、今ではすっかり当たり前の景色になったよ。ほら、こっちは大晦日の晩に家族揃っておせち料理を食べるって話をしたことがあったよね。一年の終わりはレコード大賞を見ながら年越しそばを食べるのが定番だった僕にとって、この町の年越しスタイルは外国に来ていような気分をさせてくれたものだよ。もつとも、僕が育った町にも、餅つき踊りという伝統芸能を踊りながら新年を迎える地区があったから、年越しの流儀なんて星の数ほどあるのだからね。

そんな話をいつものバーでマスターと話していたら、たまたま居合わせた中国系の青年が、中国北部の年越しの様子を聞かせてくれた。かの地では西暦ではなく、旧正月(春節)を迎える前の晩の夜中に、家族揃って餃子を作って食べる。年越し餃子の習慣があるそうなんだ。餃子の発音と、子孫繁栄の意味を持つ「交子」の発音が同じことから、お正月には餃子をたくさん食べてお祝いしようってことらしいよ。

また、由来はもう一つあって、餃子の形が昔の中国で通貨代わりに使われた馬蹄銀(ばていぎん)に似ていることから、餃子を銀に見立てて「一年間お金に縁がありますように」と願いを込めて食べるようになったそうだよ。さっそく馬蹄銀を検索してみたけど、なるほど確かに餃子の形だ。面白いのはこの餃子、中に銀貨をこっそり入れておくそうで、銀貨入り餃子を食べた人は「お金に困らない」というおみくじ的な要素もあるみたい。

あれ、こっかが聞いたような話だなあと思ったでしょ。そう、フランスのキリスト教の祝日「公現祭」で食べるお菓子「ガレット・デ・ロワ」でも似たようなことをしていたね。フェーブと呼ばれる小さな陶器を一つだけ忍ばせて、切り分けられたガレット・デ・ロワの中に入っていたら一年を幸せに過ごせるってルールだったね。国も文化も大きく異なる二つの地域で、同じような風習があるのはとても興味深い。ちなみに、中国の餃子では銀貨のほかに水砂糖やピーナッツも入れるそうで、水砂糖を引き当てた人には「甘い蜜のように安楽な生活」、ピーナッツは「健康長寿」が訪れる縁起物なんだってさ。

いかにも日本人受けしそうな風習なので、日本でもそのうち流行るかもね。というより、餃子に目がない僕としてはぜひ流行ってほしいなあ。いや待てよ、中華会館があったり、開港当初から多くの中国人が行き来していたこの町なら、おみくじ餃子を楽しんでいる家庭があるかもね。さっそく検索してみると、さすがにフェーブ入り餃子はヒットしなかったけど、「虎の星ギョーザ」という餃子専門店があることが分かったので行ってみた。

向った先は、函館市民の台所として知られる市場「中島廉売」。目抜き通りを歩いていくとひととき目立つ黄色い看板が出ていたのですぐに分かった。巨人の星ではなく、虎の星を名乗るといふことは、阪神タイガースファンの大阪のおっちゃんかひたすら餃子を焼いているのだろうか。期待と不安を抱きつつ店に入ると、「いらっしやいませ」と、拍子抜けするようなきれいな標準語で若い夫婦が迎えてくれた。「お好きな席にどうぞ」。

メニューには焼き餃子と水餃子の他、しそ、スタミナ、ねぎみそなど複数の名前が並んでいた。食べ比べセットも捨てがたかったけど、ここはシンプルに焼き餃子と水餃子で攻めてみることに。これが大正解。毎朝皮から手作りしているというだけあって、ぷりぷりのもつもちもちな食感と、噛むほどにしみ出す具材の旨味が、餃子にはうるさい僕も思わずうなったよ。驚いたことに、旦那さんは元々勤め人で、転勤して訪れたこの中島廉売をひと目で気に入って、独立を思い立ったんだってさ。好きな街の一部になりたいという思いが伝わる餃子を君も食べにおいで。もちろん、メニューにはビールもあることは確認済みだよ。それじゃあまた。

さらに詳しくはWEBへ



法人会は会社経営の効率化のためにe-Taxの普及を支援しています。

イータックス

検索